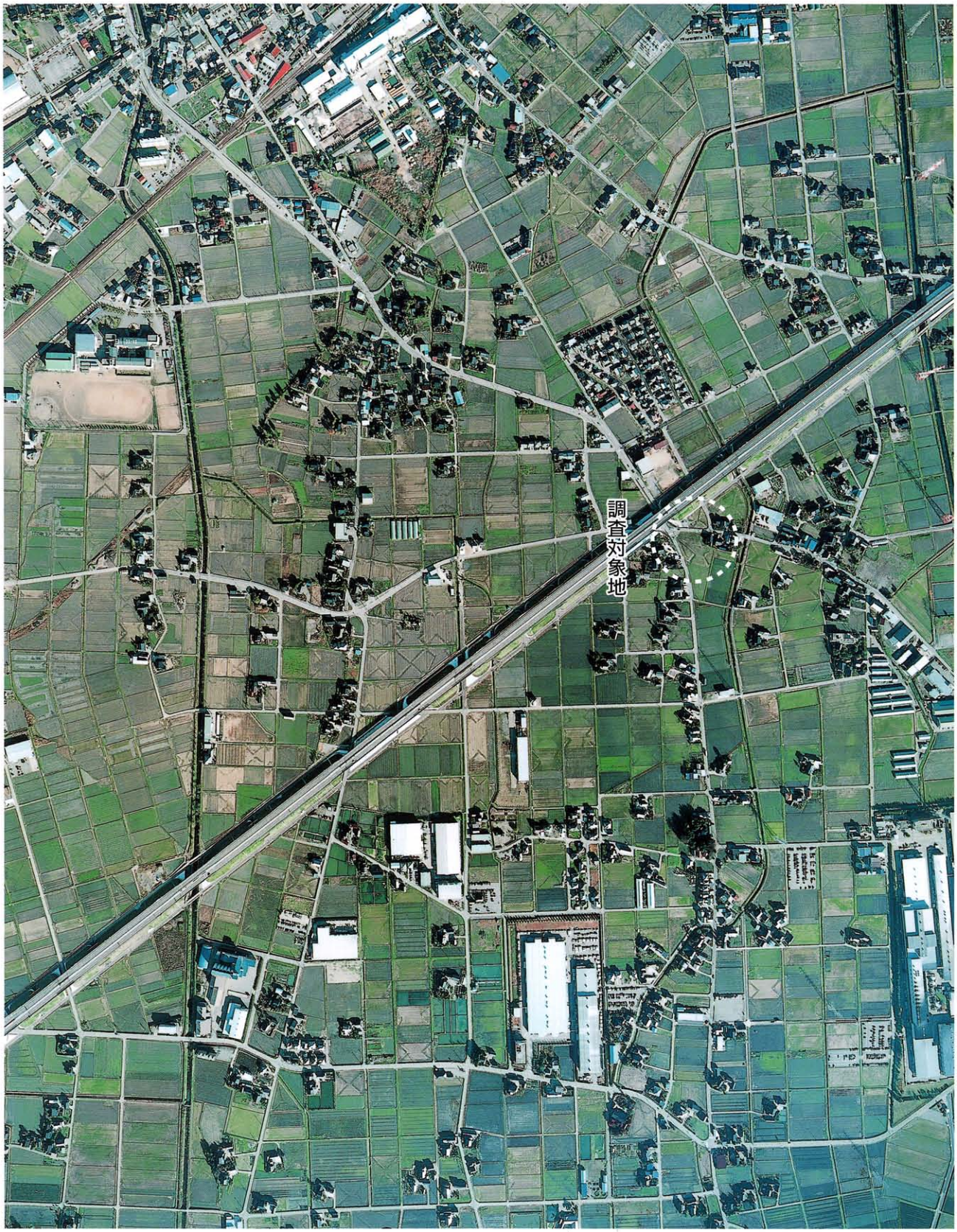
主要地方道福光福岡線歩道新設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

富山県福岡町

江尻遺跡発掘調査報告

2002年３月
福岡町教育委員会



カラー図版１　　調査対象地航空写真（１/10,000）

カラー図版２　　調査地全景

カラー図版３　　立山連峰を望む（北西から）

序

福岡町は水と緑が豊かなところです。調査地である江尻地区は、砺波平野の北端に位置し、水と緑の田園風景を醸成しています。近年、能越自動車道の建設に伴う調査で江尻遺跡が確認され、発掘調査によって、縄文時代晩期～近代の遺構・遺物が見つかっています。

今回の調査は、能越自動車道を南北に縦断するように走る主要地方道福光福岡線の歩道新設工事に伴い実施されたものです。調査により、弥生時代中期後半～終末期を主体とする遺物が出土し、近世の井戸や旧流路が確認されました。こうした発掘調査成果が江尻地区の歴史を考える素地となり、埋蔵文化財保護意識の向上に資することになれば幸いです。

調査の実施にあたり、御理解を賜りました富山県小矢部土木事務所をはじめ、御協力を下さった地元住民の皆様と関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

平成14年３月

福岡町教育委員会
教育長　石田　伸也

例　　言

1．本書は平成13年度に行った富山県西砺波郡福岡町江尻に所在する江尻遺跡発掘調査報告である。

2．調査は、主要地方道福光福岡線歩道新設工事に先立ち、富山県小矢部土木事務所の委託を受け、福岡町教育委員会が調査主体となり実施した。

3．調査事務局は福岡町教育委員会生涯学習課に置き、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、教育次長佐伯邦夫が総括した。

4．調査担当者及び調査面積・期間は以下のとおりである。

※試掘調査・本調査担当者　　福岡町教育委員会　生涯学習課　文化財保護主事　栗山雅夫

※試掘調査期間・対象面積　　平成10年３月16日～19日：3,200㎡

※平成13年度本調査期間・面積　平成13年10月30日～11月28日：300㎡

5．本書の編集・執筆・写真撮影は、福岡町教育委員会文化財保護主事栗山雅夫が担当した。

6．土層の色調については、『新版　標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著、1967）に準じている。

7．本書の図版の遺物番号は実測図・写真図版ともに統一している。

8．本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。

土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、井戸－ＳＥ

9．調査グリッドは県道に沿って任意に設定した。Ｘ軸は国土座標（第Ⅶ系）から20°31′21″西偏する。標高は海抜高である。

10．発掘調査・整理作業・報告書作成にあたって、下記の参加を得た。

高田優子・増山真由美

11．出土遺物及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。

12．現地調査及び本書の作成に際して下記の諸氏・関係機関から御指導・御教示・御協力を得た。記して謝意を表します。

久々忠義・大野淳也・景山和也・景山奈央子・江尻自治会

目　　次

序　文

例　言

目　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　江尻地区の位置と地形……１

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡……２

第２章　調査に至る経緯……４

第３章　調査の成果

第１節　調査方法と調査経過……５

第２節　基本層序……７

第３節　遺　構……８

第４節　遺　物……12

第４章　　結　語……17

参考文献

写真図版

挿図目次

第１図　地形と周辺の遺跡……１

第２図　明治42年地形図……３

第３図　大正10年地籍図……３

第４図　試掘トレンチ位置図……４

第５図　調査区位置図……５

第６図　調査グリッド図……６

第７図　基本層序模式図……７

第８図　ＳＥ01実測図……８

第９図　土層断面図……９・10

第10図　遺構平面図……11

第11図　遺物実測図（１）……13

第12図　遺物実測図（２）……15

表目次

第１表　出土遺物観察表……16

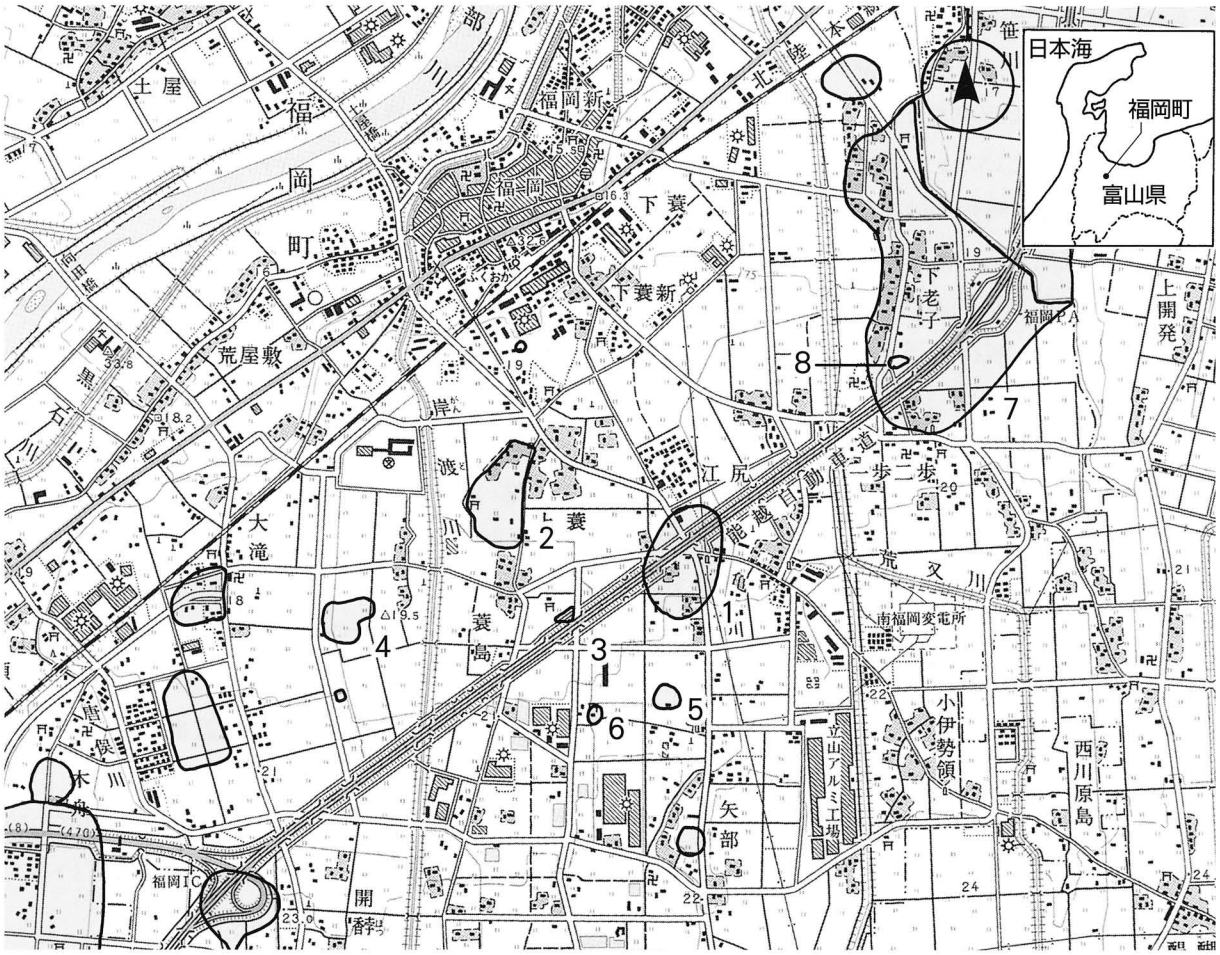
第１章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　江尻地区の位置と地形

福岡町は、富山県西部の「呉西」と呼ばれる地域の西端に位置する。町域は南東の平野部と北西の丘陵部に二分され、両地形を区切るような形で小矢部川が流れている。平野部は砺波平野の北西端にあり、小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地の扇端部でもある。一方、丘陵部は町総面積の3/4あまりを占め、宝達山を主峰としながら能登半島の山々に連なっている。

平野部は北東に流れる小矢部川によって大きく二分され、「川西」「川東」と通称される。ここは、砺波平野の扇状地扇端部にあたるため、湧水面が高い。また、度重なる河川の氾濫原となっていたことから、圃場整備以前は沼状の場所が多かったようである。西井龍儀・久々忠義らの研究によると、縄文晩期～弥生時代の砺波平野の遺跡は、水田稲作の開始により扇状地末端部と平野外縁の丘陵地に立地することが明らかにされている。（西井1985）（久々2001）

今回の調査を行った江尻遺跡は「川東」にあたり、標高19m程で北に向かって緩やかに傾斜している。平成７年に行われている能越自動車道関連発掘調査によると、調査地の北側には縄文時代晩期以前に形成された自然谷地形が確認されている。



第１図　地形と周辺の遺跡（1/25,000）　1. 江尻遺跡 2. 上蓑中田遺跡 3. 蓑島遺跡 4. 蓑島前川原遺跡 5. 矢部北遺跡 6. 矢部神宮寺跡 7. 下老子笹川遺跡 8. 土倉兵衛館跡

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡

１．歴史的環境

江尻の地名は、庄川と小矢部川が合流していた頃、川の尻にあったため江尻と呼ばれるようになったと伝承されている。これは、河川改修を受けている荒又川が、改修以前には集落のすぐ東側を流れていた地理環境を反映したものと推測される。

江尻集落の変遷をみると、藩政期には五位組の１ヶ村、明治17年の戸長役場廃止後は道明村に属していた。その後、町村制に基づいて山王村のひとつとなり、昭和15年に福岡町となっている。なお、戸長役場について興味深い遺物が能越道建設に伴う発掘調査で発見されている。それは、「戸長　小神村・小矢部村　役場」裏に「役場」と書かれた木札で、「戸長役場」の存在した時期が明治12年～明治17年の5年間に限定できることから、近隣に戸長役場・戸長に関係した人物・施設が存在した可能性が指摘されている（森1996）。出土地点は、調査対象地の30m余り西方である。

能越道建設に伴う江尻遺跡の発掘調査については、現在、概要が刊行されている（富文振1996）。詳細は、本報告を待たなければならないが、概ね次のような事実が判明している。

調査区は西からＡＢＣの３区に分割され、Ａ地区では17世紀～18世紀の豪農クラスの屋敷地が確認され、縄文晩期・弥生時代末・古墳時代前期・中世の遺物が包含層から出土している。

Ｂ地区では、比較的小規模な掘立柱建物群が17世紀代に先行し、18世紀に土台建物に転換していることが明らかにされている。前述した戸長役場の木札は、この調査区で出土している。下層は縄文時代・古墳時代・中世の遺構が同一面で検出され、遺物には弥生時代末のものも含まれている。

Ｃ地区では、大規模な削平により一面で近代～弥生時代まで遡る遺構が検出されるが、居住関係のものは確認されていない。弥生時代については、溝の形態等から水田遺構の存在も想定されている。また、下層の縄文時代では自然流路が確認されたのみである。

こうした成果から、本遺跡は縄文晩期に人間の活動痕跡が認められ、弥生時代末頃に水田を伴う定住生活に移った可能性がある。以後、一時途絶えるものの、中世後期には再び居住が始まり、近世以降完全に定着し、現在に至っているものと推定される。

２．周辺の遺跡

近隣で発掘調査が行われている遺跡として、開蓙大滝遺跡（1993県財団）、石名田木舟遺跡（1993～1995年県財団、1996町教委）、蓑島遺跡（1995年県財団）・下老子笹川遺跡（1995～1998年県財団、1997町教委）があり、これらの遺跡概要は以下のとおりである。

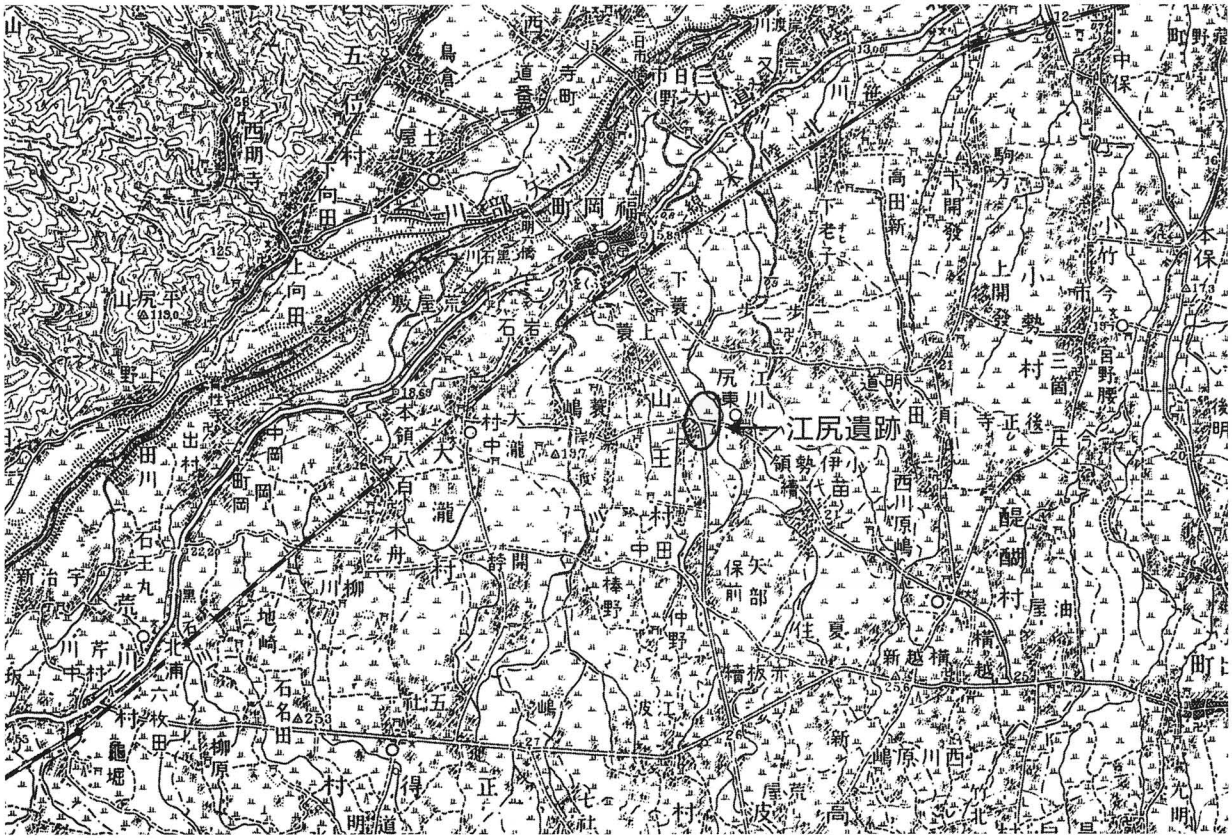
開蓙大滝遺跡は、16世紀後半の町屋遺構群で計画的な町並景観をもつ木舟城の城下町遺跡である。

石名田木舟遺跡は、15世紀後半～16世紀の城下町と木舟城を内包する遺跡である。

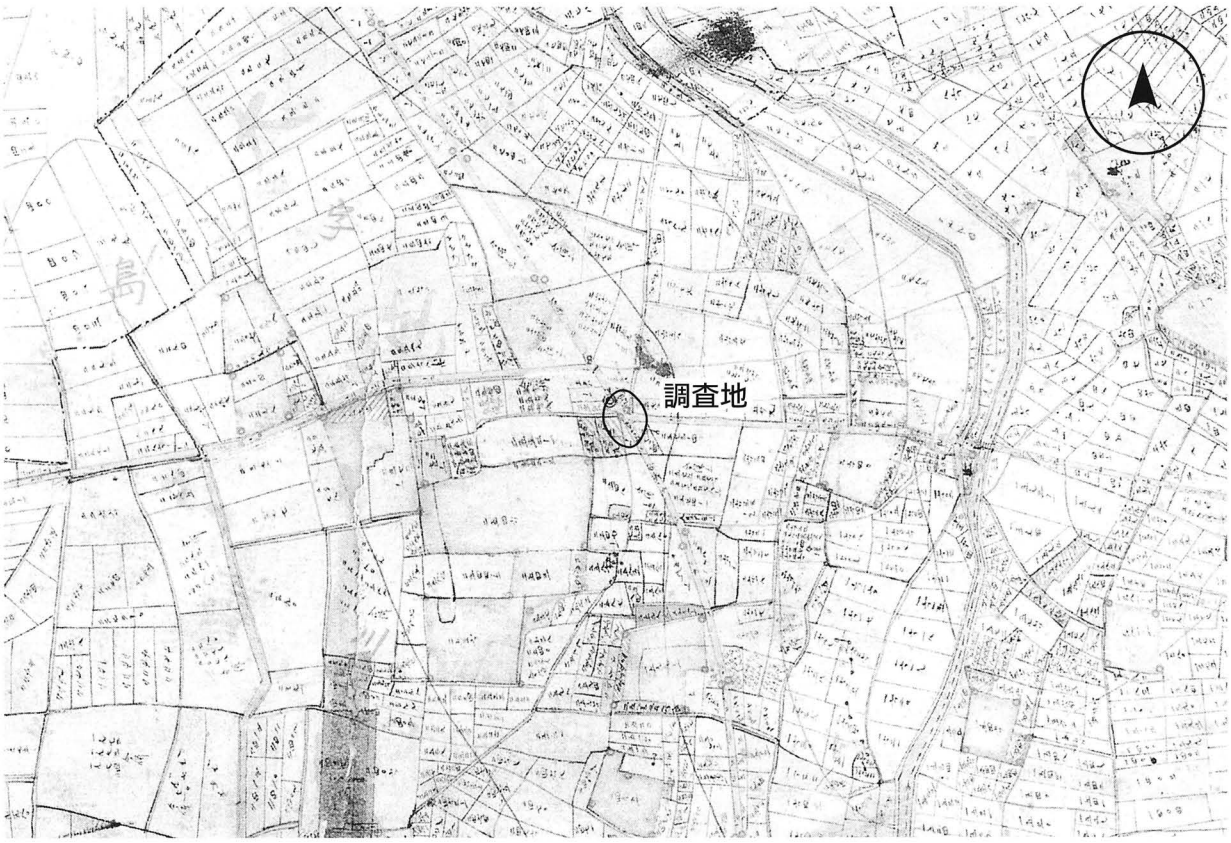
蓑島遺跡では、溝・溝状遺構を中心に縄文晩期・弥生時代終末～古墳時代前期・近世以降の遺物が確認されている。

下老子笹川遺跡は、縄文晩期～近世にいたる大規模な集落遺跡であるが、縄文晩期の集落や弥生時代後期の周溝をもつ建物、弥生終末～古墳時代中期の水田遺構、近世～近代の集落が確認されている。今回の調査でも少数出土している天王山式土器もまとまりをもって出土している。

これらの遺跡の立地は南北方向に連なって分布する傾向がある。これは、庄川の度重なる氾濫と小矢部川に流入する小河川が微高地を形成し、その上に遺跡が営まれた結果と理解される。



第２図　明治42年地形図（1/50,000）



第３図　大正10年地籍図（1/1,200）

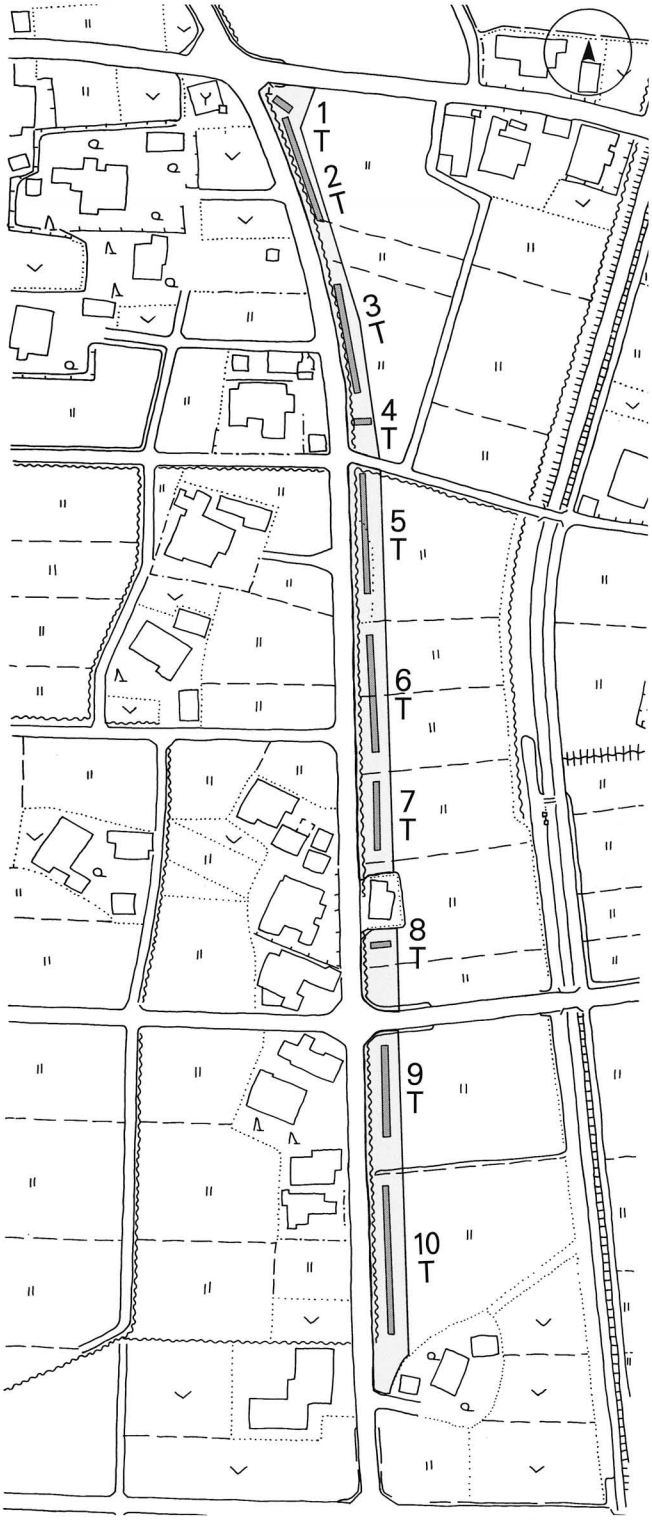
第２章　調査に至る経緯

平成９年９月、福岡町教育委員会において富山県小矢部土木事務所・町建設課・町教育委員会の３者で主要地方道福光福岡線の歩道新設工事に関する遺跡の取扱いについて協議がおこなわれた。席上、事業者側から工事着工は、当時建設中であった能越道の完成後の予定であること、当面は交差点付近の工事であるが、将来的には、南に向かって延長していくことも計画していることが説明された。

これを受け、教育委員会としては事業対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である江尻遺跡内に該当していることから、まず事前に試掘調査を行い遺構・遺物の有無を確認し保護措置を必要とするか調査する必要があることを説明した。また、本来は用地買後に試掘調査を行うのが通常であるが、地権者の承諾を得られるのであれば買収前に試掘調査を行う方向で話を進め、将来的な事業予定地まで試掘調査を行うことで合意した。

この時点での試掘調査実施予定時期は、翌年秋の稲刈取り後であったが事業者の予算の関係もあり、急遽平成９年度中に調査を行うこととなった。このため、平成10年１月26日付で埋蔵文化財発掘調査の通知を受け、雪解けを待って同年３月16、17日に試掘調査を実施した。

試掘トレンチは10本設定し、１～５Ｔにおいて遺構・遺物が確認されたことから、遺跡の保護措置を必要とする場所はこの部分までとした。このうち、今回の調査対象となったのは１・２Ｔ部分である。



第４図　試掘トレンチ位置図（1/2,500）

第３章　調査の成果

第１節　調査方法と調査経過

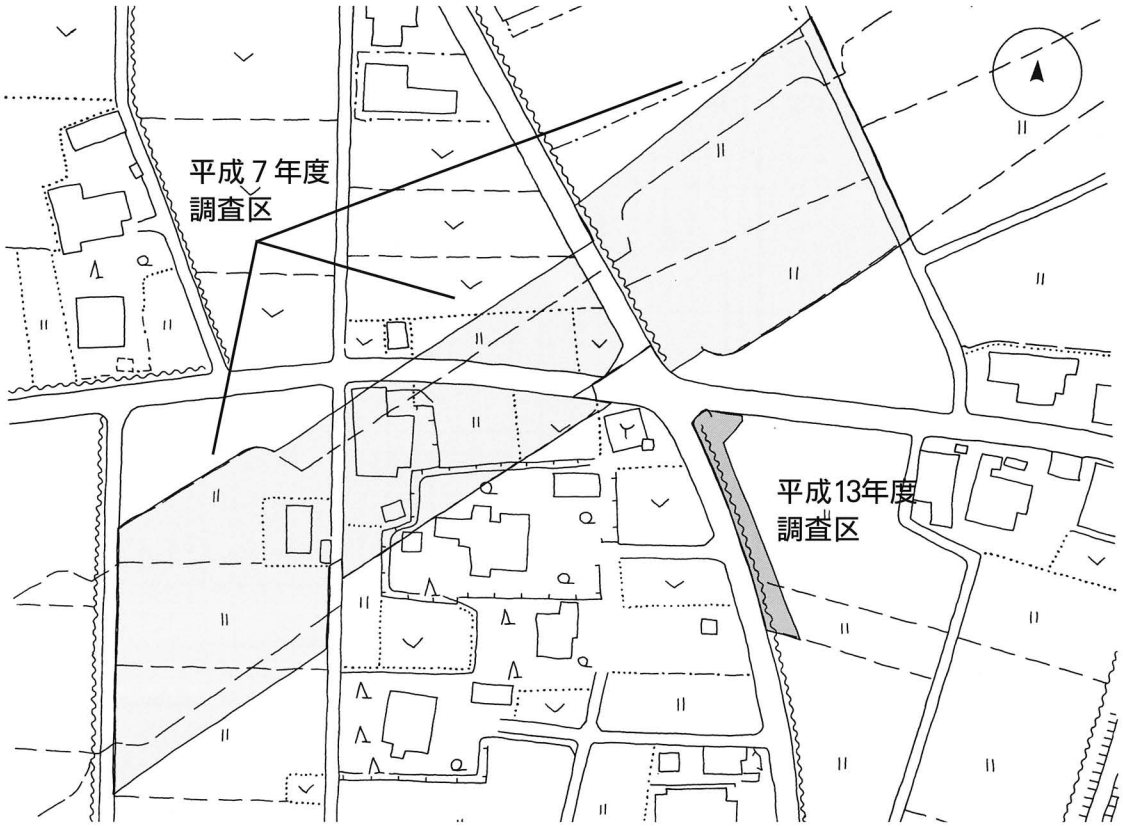
１．調査計画

江尻遺跡は、能越自動車道の建設に伴う分布調査により、平成３年度に発見、平成４年度に試掘調査を実施し遺跡の存在が確認され平成７年に本調査が行われている。事業対象地は能越道に隣接していることから、土層や遺構確認面など能越道の調査成果を援用しながら発掘を進めた。

なお、平成12年度に水田耕作のための仮設水路が調査区を分断する形で設けられている。当該箇所については、試掘時や水路設営時の工事立会においても、遺構・遺物は確認されていないことから、調査に際しても現状のままで残すこととした。このため、調査区は北側のⅠ区と南側のⅡ区に分かれる。調査対象面積は約300㎡である。調査計画は試掘調査のデータを基に、「富山県埋蔵文化財発掘調査基準」に基づき調査期間・費用を積算した。

２．現地調査

調査は重機により表土を除去した後、調査区にあわせ任意にグリッド設定した。座標は南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とした。調査グリッドは２m四方を１区画とし、Ｘ０～32、Ｙ０～５まで設定した。Ｘ１Ｙ２は国家座標のＸ座標77295.957・Ｙ座標－20103.0154で、Ｘ30Ｙ2がＸ座標77349.2058Ｙ座標－20125.9733となる。グリッド設定後、平板測量により調査区の概略図を作成し、人力による遺物包含層の掘削、遺構の精査、遺構掘削をおこなって記録を取った。出土遺物は現地事務所で水洗・注記を行った。遺構平面図の作成は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量で図化を行った。



第５図　調査区位置図（1/2,000）

調査開始後、北側部分は、遺構確認面が砂礫層となり、上層部は削平を受けて包含層の遺存状況はあまり良好では無かった。また、近代以降の流路であるＳＤ02は、最深部で現水田面から1.8m以上となり、現道上からは2.5m以上の比高差となる。この流路からは非常に豊富な湧水があり壁面崩壊の可能性も考えられたことから、掘削は両岸から基本土層を確認しながら掘り下げて、遺物が無いことを確認した時点で掘り下げるのを止めている。試掘調査によりこの流路から湧水があることは確認されていたので、流路の深部と想定される場所に調査区を東西に横断する土層観察用のアゼを残して堆積状況の記録をとった。

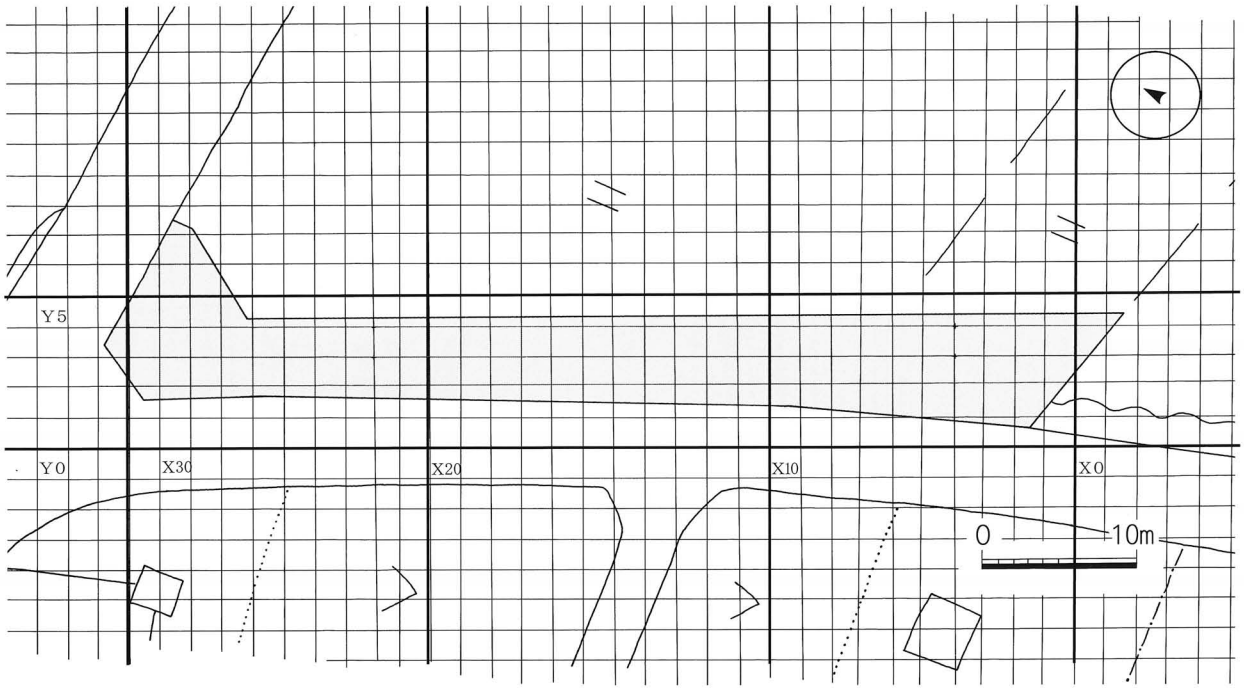
調査日誌抄

10／30	表土除去	11／14～21	溝02掘削
10／31	機材搬入	11／22	空撮
11／１	杭打ち	11／26	井戸断割り作業
11／２～13	遺物包含層掘削・遺構検出	11／27・28	埋戻し終了し、現地調査完了

３．遺物整理

現地事務所において水洗・注記作業まで完了させた遺物は、現地調査終了後整理室に運び込んで整理作業を開始した。作業は調査員１名と調査補助員１名の２名で担当した。出土遺物は、接合・実測と必要に応じて石膏による復元をおこない、図面整理作業も平行して実施した。なお、遺物の実測は、試掘調査時の出土遺物も対象としている。出土遺物のうち、近世の石組井戸の水溜は検出時にほぼ完形の状態で出土したため、保存処理をおこなった。

これらの基礎的な記録をとった後、調査結果について総合的な検討をおこない、調査成果等の記述と図版作成、遺物写真撮影を実施し発掘調査報告書を作成した。



第６図　調査グリッド図（1/500）

第２節　基本層序

調査地周辺の基本地形は、東西を河川に挟まれた微高地上に立地しており、調査区内では東に向かって緩く傾斜している。基本層序は大きく１～３層に分類した。

第１層は、近世以降～現在の表土に伴う土層である。

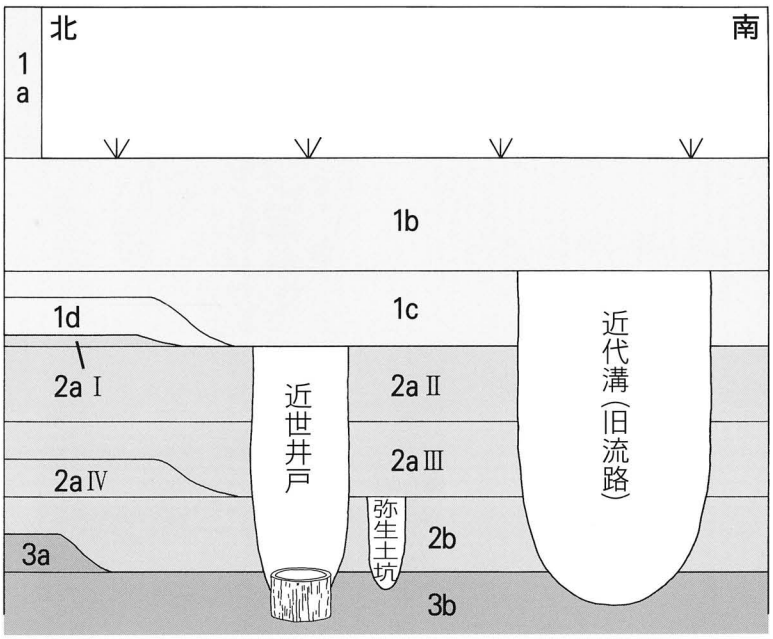
細分化すると、ａ～ｄの４層に分けることができる。このうち、１ａ層は仮設水路設置に伴う盛土、１ｂ層は水田の表土である。１ｄ層は東に沈下する谷地形を埋める形で存在し、砂とシルトが互層を成している。

第２層は、弥生中期～近世の遺物包含層である。

細分化すると、ａ・ｂ層に分かれ、ａ層はさらにⅠ～Ⅳ層に分類できる。このうち、２ａⅠ層は３cm程度の厚さしかないが植物遺体を多く含む。２ａⅠ層と２ａⅣ層はともに調査区東側の谷地形を埋めている。２ａⅡ層は20cm程の厚さがあるオリーブ灰色粘質シルトで弥生と近世の遺物が出土している。また、石組井戸ＳＥ01はこの土層から掘り込まれている。井戸内から近世の遺物が出土していることから、土層の堆積年は近世まで下る。２ｂ層は、弥生時代中期後半～後期の遺物包含層である。土層は10～20cmの厚さがあるが下層の礫が混入している。土質は、水分を多く含む黒色シルトで有機質に富む土である。２ａⅡ・Ⅲ層が灰色の粘質土であるのに対し、２ｂ層は黒色シルトで両者の差異は明確である。

第３層は、遺物を含まない無遺物層で地山となるものである。ａ・ｂ２層に細分している。３ａ層は10cm程の厚さがある水分を含むシルトで調査区北側の一部で確認されている。３ｂ層は、調査区の基盤地形となるもので大量の礫で構成される。弥生時代の遺構確認面はこの３ｂ層中となるが、礫の大きさが50cm大のものがゴロゴロしている上、湧水層でもあることから遺構検出を困難なものとしている。

これらの基本層序は、調査区中央を横断する近代以降の流路の両岸に安定して分布している。



凡　例

1層
- a　明黄褐色砂質土(10YR6/6)
- b　オリーブ黒色シルト(5Y3/1)
- c　灰色シルト(10Y4/1)
- d　オリーブ灰色シルト(5GY5/1)

2層
- aⅠ　暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)
- aⅡ　オリーブ灰色粘質シルト(5GY6/1)
- aⅢ　緑灰色粘質シルト(7.5GY6/1)
- aⅣ　灰オリーブ色シルト(5Y4/2)
- b　黒色シルト(2.5Y2/1)

3層
- a　オリーブ色シルト(5Y5/4)
- b　黄褐色砂礎(2.5Y5/4)

第７図　基本層序模式図

第３節　遺　構

遺構は、近代以降の溝２条（流路）、近世の井戸１基、弥生時代の土坑１基を検出した。遺構密度は非常に薄いものとなっているが、これは、弥生時代の遺構検出面が湧水を伴う礫層であって検出を困難にさせた地形要因と、調査区の中央を近代以降の大きな旧流路が横切る遺構要因による。

遺構検出は３ｂ層で一括しておこなったが、井戸ＳＥ01については２ａⅡ層で検出し、これ以降の遺構は、新しいものとなるため断面観察に拠っている。

溝ＳＤ01

北調査区西側で検出されたもので、北東へ流れ幅４ｍ以上、深さ50～80cmを測る。覆土はａ層灰オリーブ色砂とｂ層暗オリーブ灰色砂から成り、１ｂ層直下より掘り込まれるため近代以降の時期が与えられる。このうち、ａ層はピート層を薄く挟んで水性堆積を示す。ｂ層は水分が多く弥生土器を含むが、掘り込み面を考慮すると、流れ込みによるものと考えている。

溝ＳＤ02

南調査区の中央で検出され、北西へ流れる近代以降の旧流路である。検出断面では、幅25m以上、深さ130cm以上を測る。ＳＤ01と同様１ｂ層直下から掘り込むものである。埋土は、ａ・ｂ・ｃの３層から成り、ｂ層とｃ層の間には青灰色の砂が40cmの厚さで堆積する場所もある。旧流路であることから、基本的に各層とも水質土層であるが、最下層のｃ層は砂分が多く木屑も含む土層である。

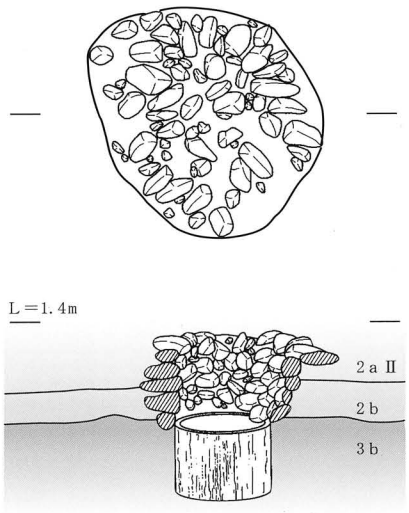
この溝内には、幹の太さが１m程、樹根が４m以上に広がる立木がある。樹木はｃ層途中で伐採されておりこの流路が埋没する途中で生えていたことがわかる。樹種は不明である。遺物は近世のものが含まれ、ｃ層からの激しい湧水は往時の流路を彷彿とさせるものであった。

井戸ＳＥ01

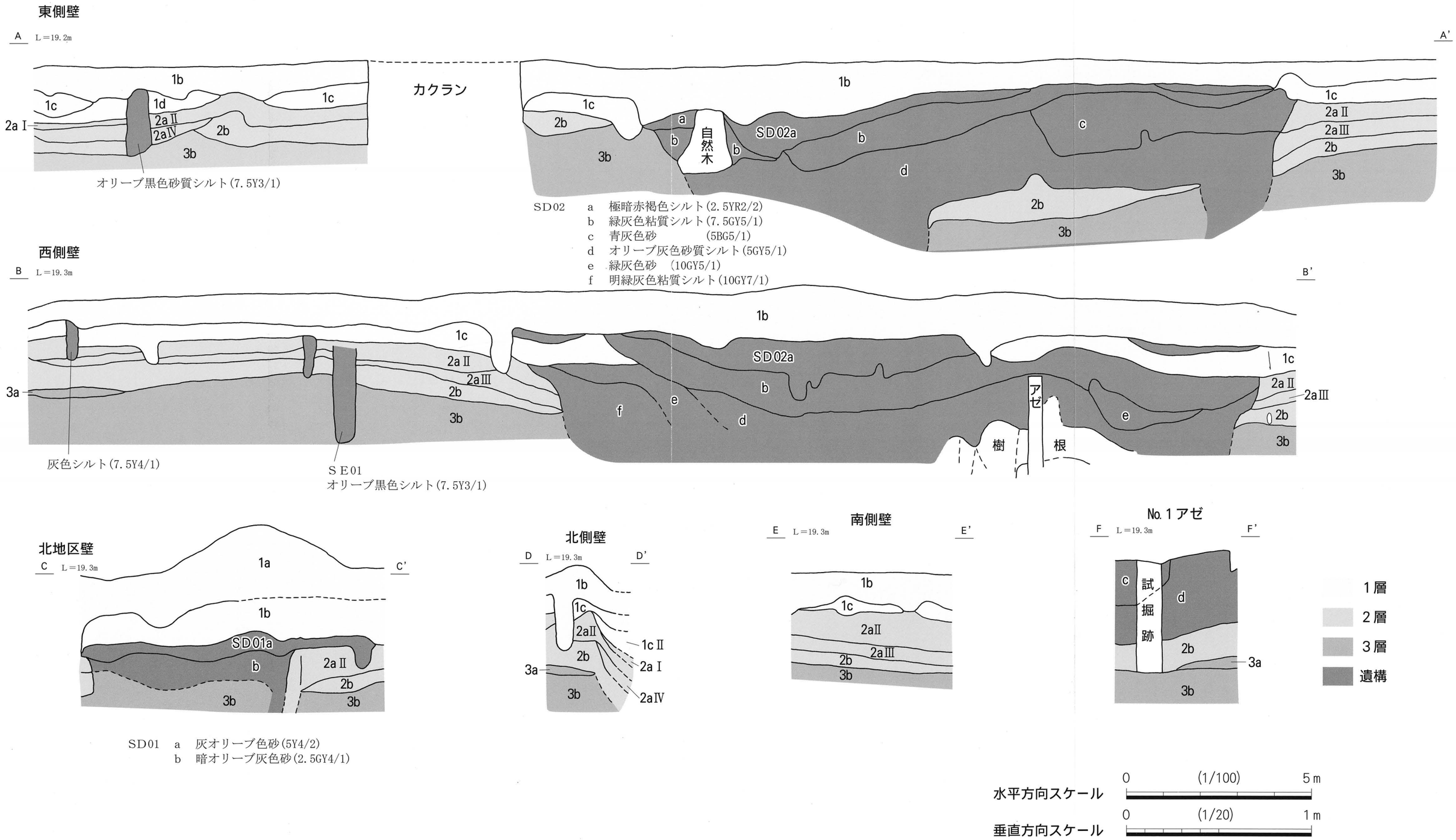
南調査区のＳＤ02北岸で検出された石組井戸である。検出時の平面プランは1.2mの円形、確認面での掘方は石組の外縁とほぼ同一であり、上部は削平を受けているものと思われる。2ａⅡ層中から掘り込まれ、検出面から水溜上部までの石組部分は深さ１m、埋土には20cm大の礫を埋めている。水溜は、高さ40cm径50cm厚さ３cmの木製の刳り貫き桶である。取り上げ後、付着した土を洗浄すると、桶内面に内赤外黒漆器椀の破片が混入しており、何らかの井戸祭祀の可能性も考えられる。埋土上面からは、越中瀬戸が出土しており、土層の堆積年代を併せて考えると近世の井戸となる。

土坑ＳＫ01

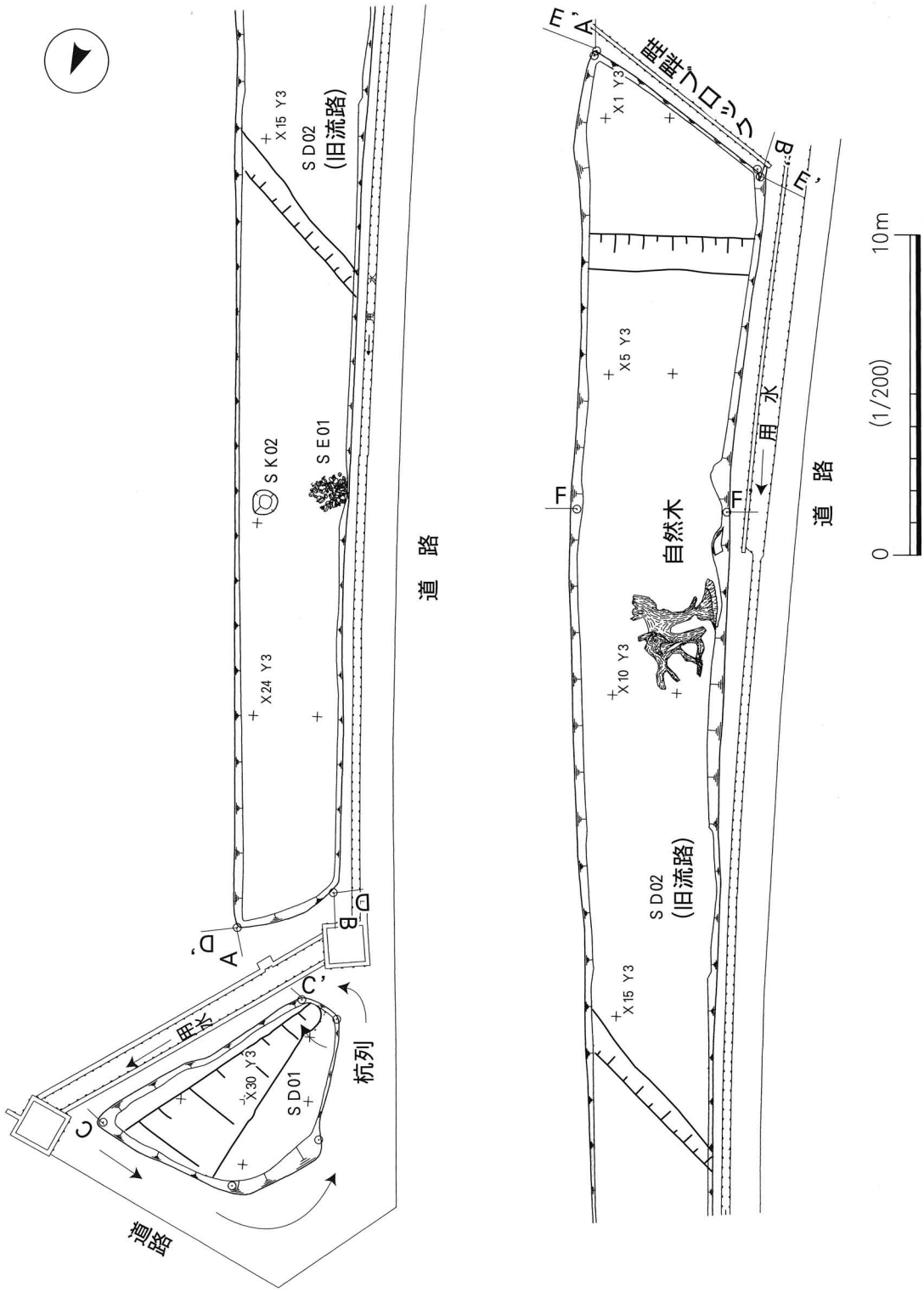
井戸の東側１m程の場所にあり、検出面は３ｂ層である。平面形は80cmの円形で、深さ70cmを測る。埋土は灰色のシルトで、遺物は含まれていなかった。掘り込み面が、弥生時代の遺物包含層である２ｂ層内であることから、弥生時代の土坑と考えている。



第８図　ＳＥ01実測図（1/40）



第９図　土層断面図（平面図1/100・断面図1/20）



第10図　遺構平面図（1/200）

第４節　遺　物

調査により出土した遺物は整理箱で４箱程度と少量である。これは、調査区の半分程度が近代の流路によって攪乱を受けていることが大きな要因となっているためである。したがって、図示できる遺物は可能な限り掲載するように努めた。また、試掘調査により出土した遺物についても掲載している。大半の遺物は今回の調査対象地に含まれないが、距離も近く遺構一括遺物もあることから掲載することとした。

１．本調査出土遺物（第11図）

遺構に伴う遺物は、近世の井戸ＳＥ01の越中瀬戸と、近代以降の溝に混入する弥生土器で、あとは包含層出土である。

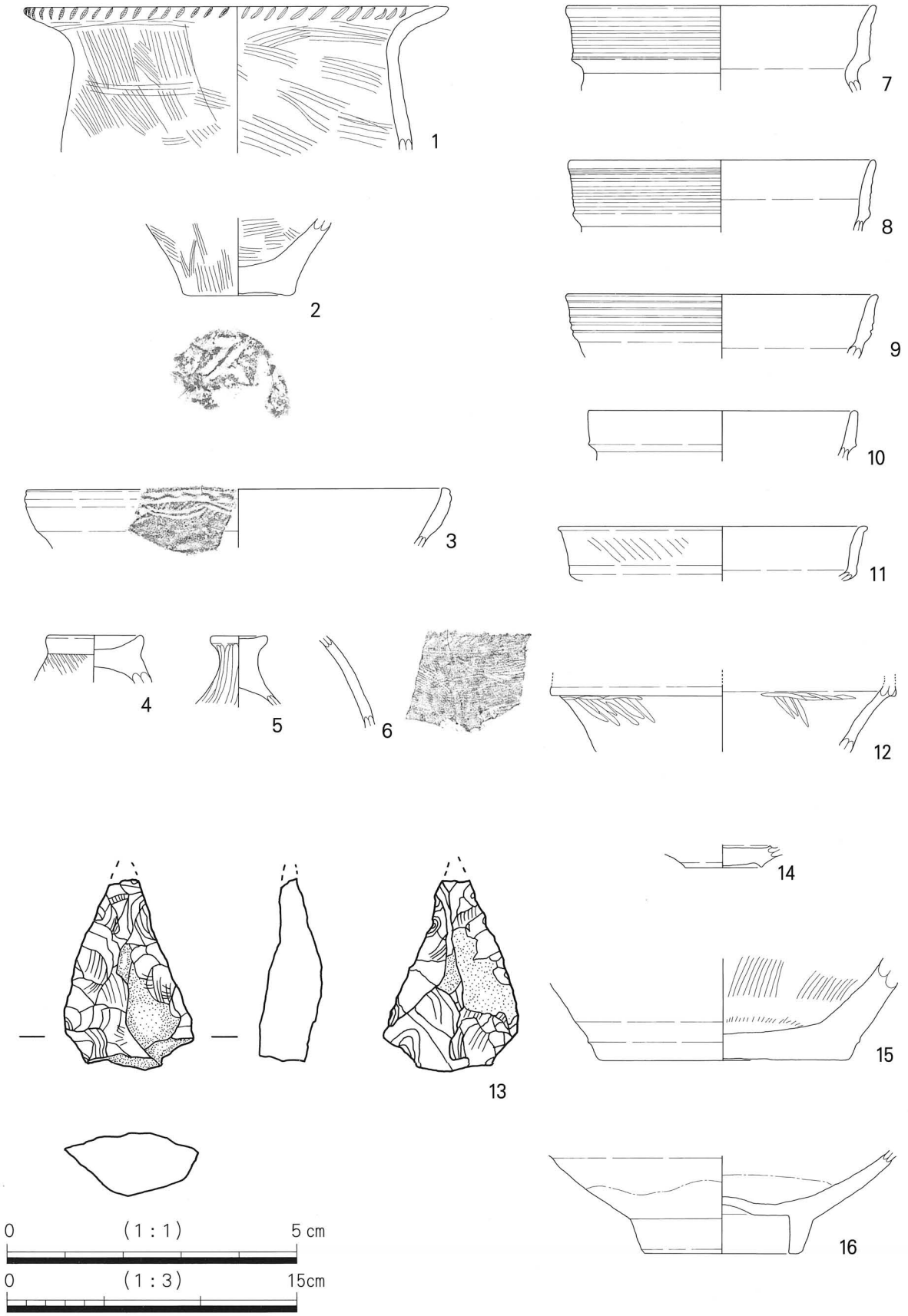
１は弥生時代中期後半の甕である。磯部運動公園遺跡から専光寺養魚場遺跡段階の土器と考えている。外反する口縁端部の外面はナデ調整されるとともに内外面に刻みを施している。器壁外面は、ほぼタテ方向のハケ調整、内面はナナメ方向のハケ調整し、底部付近は煤が付着する。２がこの土器の底部で、外面には幅４cm・長さ３cmのワラ圧痕が３本確認できる。

３～６、９～11、13は溝ＳＤ01から出土したものである。３は天王山式土器の甕口縁部である。端部には交互刺突文（刺突角度が浅い）と連弧文を施す。この土器型式は、当遺跡の１km北東に位置する下老子笹川遺跡でまとまって出土している（栗山1998）が、交互刺突文だけを抽出すると様相が少し異なっている。４・５は蓋である。４のほうが相対的に古い様相を持つもので弥生時代終末期の月影段階。タテ方向のヘラケズリが施される５は、鈕がボタン状に変化しており古墳時代前期前半の白江段階に位置付けられるものである。

７～11は月影段階の甕口縁部である。11以外はすべて煤が厚く付着している。基本的にヨコ方向のハケメが施されるが、７のみ内面にヨコ方向のミガキ調整が施されている。７・８は７条、９は５条の擬凹線を施している。10・11は擬凹線文を施さない有段無文の甕である。11の口縁端部は外反の度合いが強くやや後出的様相を示すものである。12は器台の屈曲部で外面は丁寧なミガキ調整が施されている。

13はチャートを石材とする凸基有茎式打製石鏃で長さ3.3cm、重さ6.6ｇ。茎部に茶褐色部分、刃部に黒色部分をあてて成形しており、装飾・機能両面に配慮しているものと考えられる。ただ、先端が折れ、片面には自然面が一部に残り、茎部の抉りも浅いことから未製品である。

14～16は近世以降の陶器である。14は近世の井戸ＳＥ01の埋土上層部から出土した越中瀬戸の皿である。高台は削り出しており露胎である。高台内面には墨書で「一」のような文字の一部が確認できる。見込みには１mm程盛り上がる圏線がみられる。畳付及び高台内中央と見込みの一部に灰釉が残っており、重ね焼きの痕跡と考えられる。15は越中瀬戸の擂鉢である。卸目は10条で、外面と断面の一部は煤が付着しており、破損後に火を受けたものと思われる。出土地点はＳＤ02の最下層である。16は肥前陶器の鉢である。ロクロ成形され、見込みを蛇の目釉剥ぎするものである。見込みと畳付には、焼成時の重ね積みの痕跡である白い泥漿状の砂（アルミナ砂）がみられる。文様は白化粧土による刷毛目文様が施され、高台は真っ直ぐに削り出されるもので、高台内の削りは高台脇よりも削り込んでいる。18世紀後半以降のものである。このほか図示していないものに、溝ＳＤ02から肥前波佐見の見込みを蛇の目釉剥ぎし、銅緑釉をかける皿が出土している。



第11図　遺物実測図（1）

２．試掘調査出土遺物（第12図）

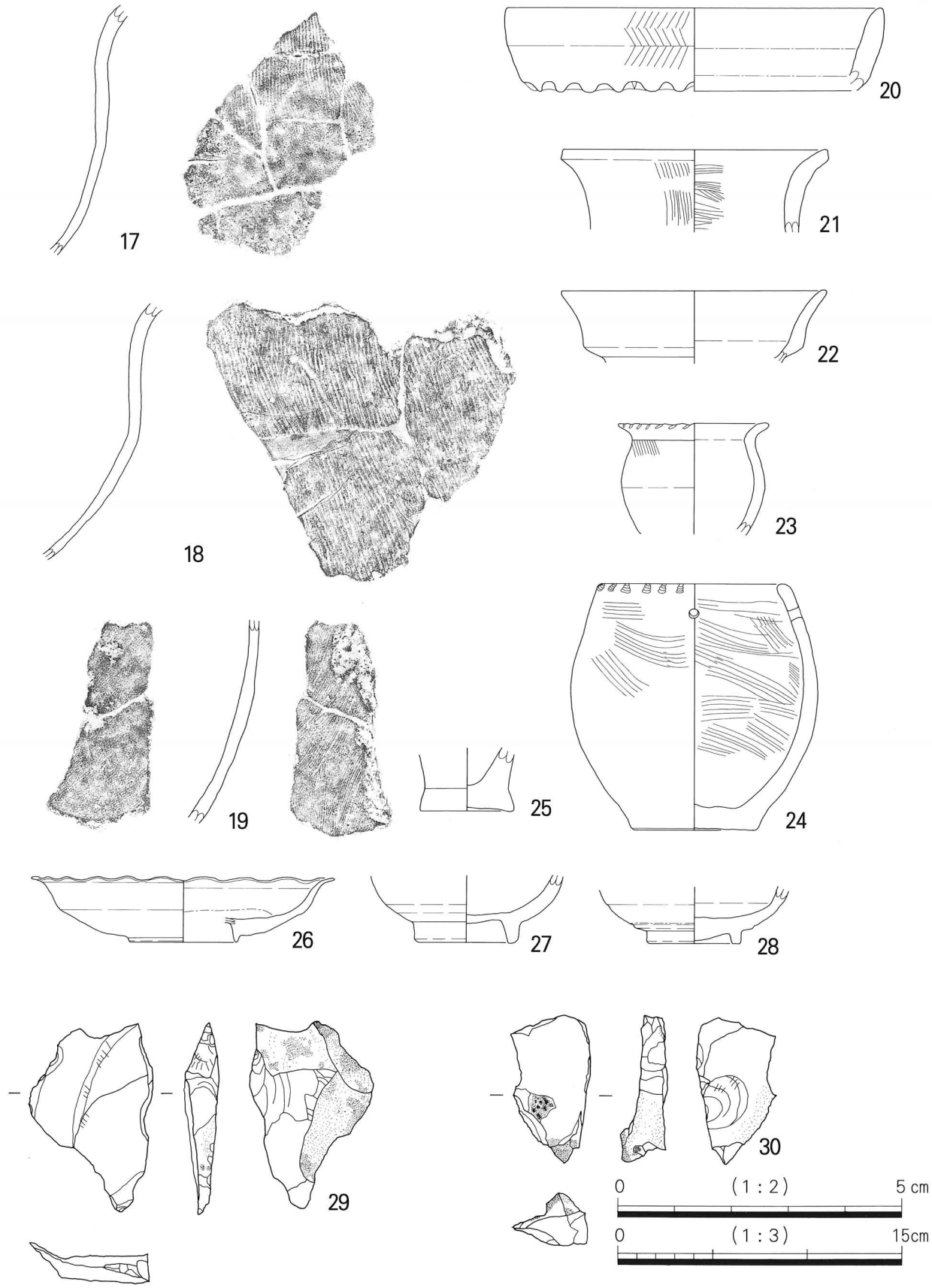
17～30は平成10年３月に実施した試掘調査の際に出土したものである。試掘調査により出土した遺物はそれほど多くなく、表土直下から出土するものが大半である。しかし、保護措置を要する範囲内には遺構に伴うものも確認されており、17～21と23～25・29・30は５Ｔの土坑ＳＫ01一括出土遺物である。

17・21・25は同一個体の甕である。表面に摩滅が見られる。口縁外面はタテ方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施されている。口縁端部は横撫でによって面取りされる無文様の平縁となり、胎土は２～３㎜大の石粒を多く含んでいる。17の体部内面下は被熱により赤く変色している。弥生時代中期後半の専光寺～戸水Ｂ式段階のものと考えている。18・19は外面に煤が付着する。外面はともにタテ方向のハケメ調整されるが、内面は18がヨコ方向のハケメ、19はナナメ方向のハケメ調整されている。両者のハケメを比較すると、18の方が１条の幅が広く凹凸が顕著であるのに対し、19は平滑な仕上げとなっている。20は有段口縁壺である。他の供伴遺物と比べて焼成が甘く、軟質で石粒が多く含まれる。口縁外面は３列の綾杉状刺突文で加飾しており弥生中期前半の小松式土器に比定されるものである。23はミニチュア土器の壺で内外面に煤が付着する。口縁部は「く」字口縁で、端部は横撫でされた上に斜行する刻目を３㎜間隔で施している。頸部にはタテ方向のハケメ調整が部分的に確認できる。器形から弥生中期後半頃のものと考えている。24は無頸壺（長卵形胴壺）で口縁には斜行短線文が施文され、その直下には対向する径６㎜の穿孔が２つ開けられている。内外面には、斜行するハケメ調整を施すが、外面は摩滅により明瞭ではない。煤は外面２箇所に底部から口縁近くにかけて付着し、内底面には指頭圧痕を確認することができる。弥生中期後半の磯部式～専光寺式段階のものと考えられる。

22は４Ｔで出土したもので、受口状の有段口縁甕で弥生終末期の月影段階のものである。擬凹線はみられないが、内外面に丁寧なヨコ方向のハケメ調整を施している。

26～28は近世段階の陶磁器である。26は見込みを蛇の目釉剥ぎした肥前磁器の白磁ひだ皿である。18世紀代に位置づけできるものである。27は肥前陶器の碗である。白化粧土による刷毛目文様が施され、畳付は露胎、高台内は高台脇とほぼ同じ高さまで削り込まれており、18世紀代のものである。28は削り出し高台の越中瀬戸碗である。

29・30は、緑色凝灰岩の剥片で、５Ｔの土坑ＳＫ01から弥生中期の土器に共伴して出土したものである。この石材は管玉等玉類の製作に用いられることが多いが、未製品やフレーク・チップは本調査対象地では出土していない。



第12図　遺物実測図（2）

第１表　出土遺物観察表

No.	X	Y	遺　構	層序	種　類	機 種	口径(長軸)	底径	器高(短軸)	色　調	備　考
1	25	3		2b	弥生土器	甕	22			浅黄色	中期後半　２とセット
2	25	2		2b	弥生土器	甕		6		灰色	外底面にワラ圧痕
3	30	2	SD01	b	弥生土器	甕	22			にぶい黄橙色	天王山式土器
4	31	4	SD01	b	弥生土器	蓋	3			にぶい黄橙色	
5			SD01	b	弥生土器	蓋	5			褐灰色	
6	30	2	SD01	b	弥生土器	甕か壺				にぶい黄褐色	
7	26	4		2aⅡ	弥生土器	甕	16			にぶい黄橙色	終末（月影期）
8					弥生土器	甕	15			褐色	終末（月影期）
9	31	1	SD01	b	弥生土器	甕	16			にぶい黄褐色	終末（月影期）
10	30	2	SD01	b	弥生土器	甕	14			にぶい黄橙色	終末（月影期）
11	30	2	SD01	b	弥生土器	甕	17			にぶい黄褐色	終末（月影期）
12	26	4		2aⅡ	弥生土器	器台				にぶい黄橙色	後期～終末
13	30	2	SD01	b	石鏃		3.3		2.2		重量6.6ｇ・チャート
14			SE01	上層	越中瀬戸	皿		4		にぶい赤褐色	削り出し高台
15	8	2	SD02	下層	越中瀬戸	擂鉢		13		にぶい黄橙色	
16	2	3	SD02	a	肥前陶器	鉢		8		にぶい赤褐色	見込み蛇の目釉剥ぎ
17			5T　SK01		弥生土器	甕				灰色	中期後半　21･25とセット
18			5T　SK01		弥生土器	甕か壺				にぶい黄橙色	中期後半
19			5T　SK01		弥生土器	甕か壺				にぶい黄橙色	中期後半
20			5T　SK01		弥生土器	壺	20			にぶい黄橙色	中期前半　小松式期
21			5T　SK01		弥生土器	甕	14			浅黄色	中期後半
22			4T	①b	弥生土器	甕	14			にぶい黄橙色	終末（月影期）
23			5T　SK01		弥生土器	壺	8			にぶい黄橙色	中期後半、ミニチュア土器
24			5T　SK01		弥生土器	無頸壺	10	6.4	13	浅黄色	中期後半
25			5T　SK01		弥生土器	甕		5		灰色	中期後半
26			6T	①b	肥前磁器	ひだ皿	16	5.6	3.5	灰白色	見込み蛇の目釉剥ぎ
27			1T	①b	肥前陶器	碗		5		にぶい赤褐色	刷毛目文様
28			2T	①b	越中瀬戸	碗		5		にぶい褐色	削り出し高台
29			5T　SK01		剥片石器		6.7		4.2		重量21.9ｇ･緑色凝灰岩
30			5T　SK01		剥片石器		5.2		2.7		重量15.2ｇ･緑色凝灰岩

第４章　結　語

今回の調査対象地は300㎡と狭少であり、近代の流路が大半の遺構を削っているものと考えられ、主たる調査目的であった弥生時代の遺構・遺物の数量は決して多いものとは言えない。しかしながら、能越自動車道建設に伴う江尻遺跡の発掘調査が隣接する場所で行なわれ概要が刊行されていることや、当面の事業計画地全域の試掘調査を先行して行なっていることで、調査区外の様子も把握することが可能な状況である。本調査結果に、これらの調査成果を援用することによって、遺跡の様相はある程度のレベルまで明らかにすることが可能となっている。

出土土器について

今回の調査地の土器様相を考える上で、平成７年度に行われた富山県文化振興財団による江尻遺跡の能越道関連発掘調査成果は大きな手掛かりとなるものである。調査による出土遺物は、縄文晩期～近代の各時期の遺物が出土しているが、その中でも主体を占める時期は弥生時代と近世・近代の遺物である。今回の調査対象地からみて北西に位置する調査区では、弥生時代終末期の月影式段階～古墳時代前期の遺物が出土し、北側に位置する調査区では弥生時代後期後半の遺物が出土している。近世段階については17世紀～19世紀の遺物が出土するなかで主体は概ね18世紀以降にあることが報告されている（富文振1996)。

さて、本調査により出土した遺物のうち、図示したものの大部分は近代以降の溝と考えているＳＤ01から出土したものである。この溝は土層の切り合い関係から近代の溝と判断したものであるが、混入する遺物に当該期のものは無く、弥生時代終末期月影式段階の遺物が主体を占めている。その中には天王山式土器も混入している。前述したように、天王山式土器は下老子笹川遺跡でのまとまった出土例（栗山1998）があるが、本遺跡においても小破片であるが数点出土しており注目される。天王山式土器の時期については、弥生時代の中期とみるか後期とみるかで現在も活発な議論がなされているところであるが（石川2000)、本遺跡の出土例は混入によるものであり資料価値は低い。しかしながら、弥生時代終末期の月影式土器と共伴する形での出土状況、能越道発掘調査に伴う出土遺物が弥生時代後期後半～終末期段階のとどまり、それ以前は縄文晩期まで遡ってしまうことを考慮するなら、この土器型式の上限はともかくとして、弥生時代後期以降の土器と共伴することを示すものといえる。

また、試掘調査により出土した土器のうち、５Ｔで検出した土坑ＳＫ01は一括資料となるものである。推定10個体程度の出土土器のうちで、１個体は弥生時代中期前半の小松式土器段階まで遡るが、主体は磯部～専光寺～戸水Ｂ式と呼ばれる弥生中期後半の土器群の範疇に収まるものである。筆者の力量不足もあり各段階を明確に分類した形で量比を提示することはできないが、５Ｔ付近の主体時期は弥生時代中期後半にあるものと想定される。さらに、Ｘ25Ｙ３付近の弥生時代の遺物包含層から出土した１・２の弥生土器は中期後半に位置付けされるものであり、遺跡の年代が弥生中期まで遡ることは確実といえる。

さらに石器に目を転じれば、５ＴＳＫ05で弥生中期の土器と共伴して出土した緑色凝灰岩の剥片は注目される。下老子笹川遺跡では弥生時代後期後半を中心とする住居跡に伴ってガラス小玉や緑色凝灰岩・鉄石英の勾玉や管玉の未製品、フレーク・チップがまとまって出土しており玉作り工房の存在が

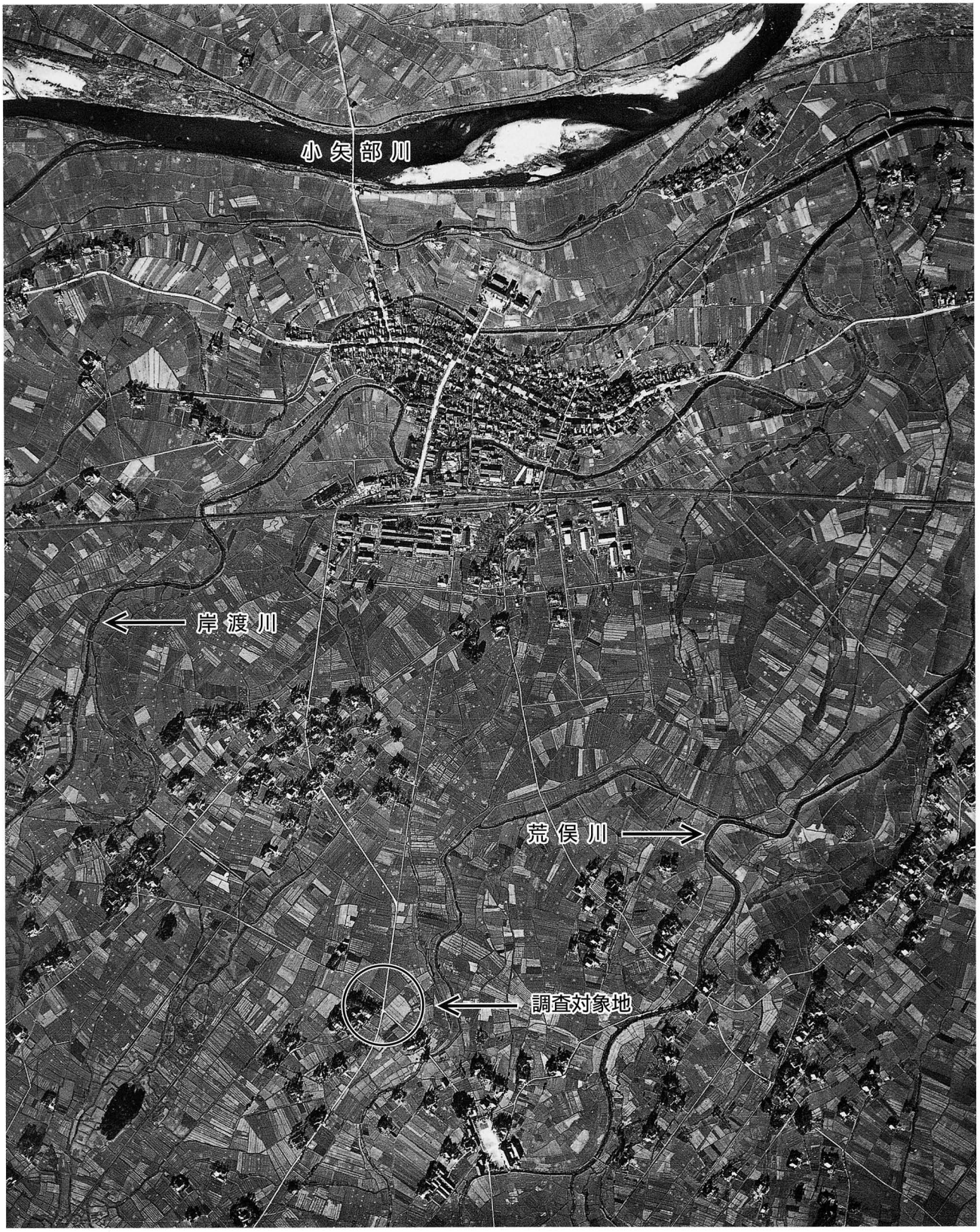
指摘されている（富文振1997、1998）。下老子笹川遺跡の住居跡と当遺跡ＳＫ05の遺構時期にはズレがあり検討を要する面は多々あるが、江尻遺跡においても玉作りを行っていた可能性を指摘することができる。

近世段階の遺物については、18世紀代の遺物が主体となっており、能越道の発掘成果と矛盾するところはない。井戸ＳＥ01から出土した越中瀬戸についてもこうした時期に収まるものと考えている。現在の江尻集落に直結する時代として、18世紀代がその画期となっていることは明らかといえよう。

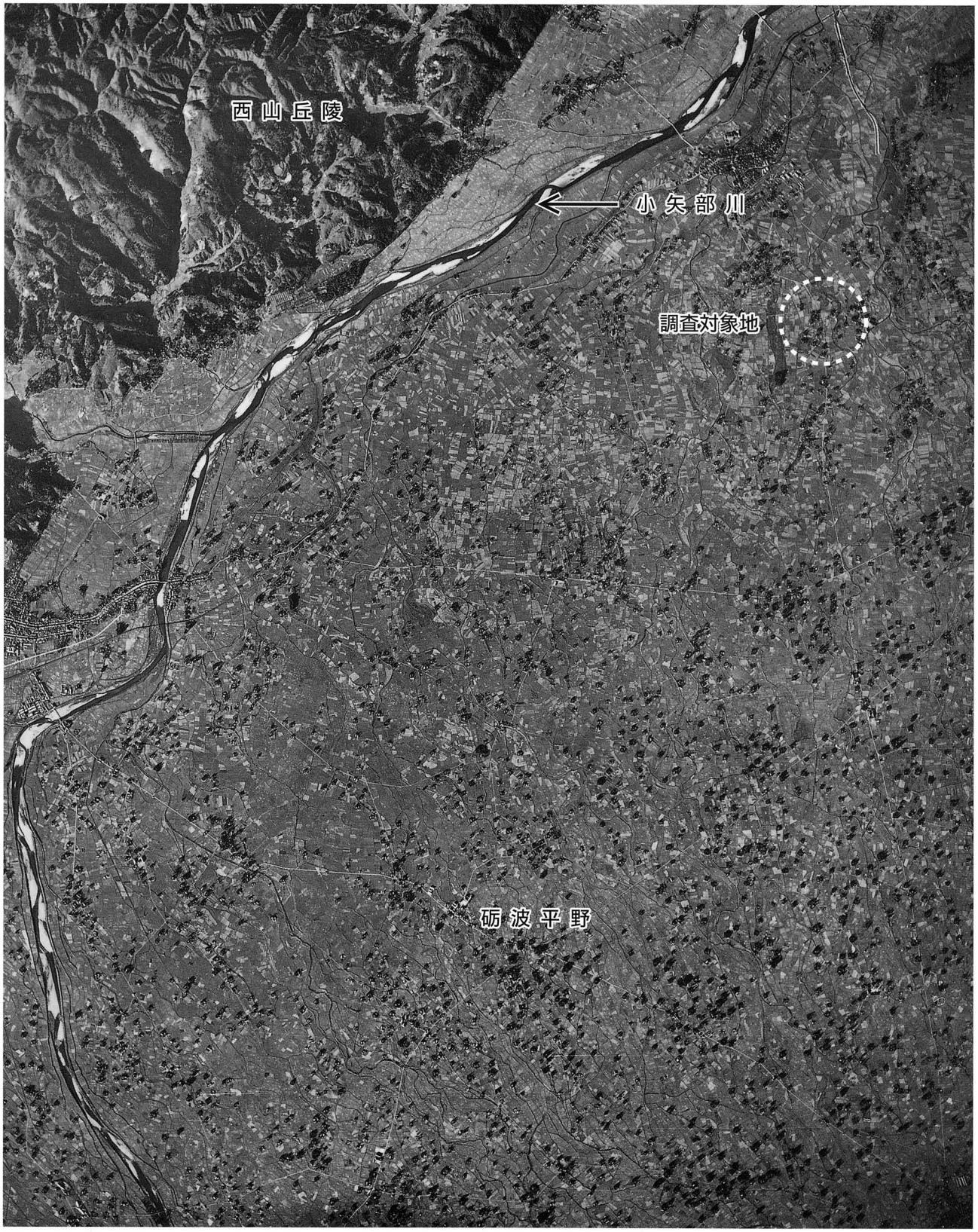
現時点では、明確な弥生時代の遺構が確認されておらず資料不足の感は否めないが、能越道関連発掘調査の正式な報告書の刊行と今後に予定される南地区での発掘調査を実施することで遺跡の姿はより鮮明なものになっていくものと思われる。

参　考　文　献

石川県立埋蔵文化財センター　1992　『金沢市戸水Ｂ遺跡―第４・５次調査』
〃　1994　『金沢市戸水Ｂ遺跡』
石川　日出志　2000　「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』11　新潟県考古学会
岡本淳一郎ほか　1999　「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究紀要』２　財団法人富山県文化振興財団
小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』　石川考古学研究会
河合　忍　2000　「弥生時代中期後半土器の併行関係と暦年代観」『石川県埋蔵文化財情報』３　（財）石川県埋蔵文化財センター
木田　清　1998　「法仏式土器の認識と再確認」『石川考古学研究会々誌』41　石川考古学研究会
久々忠義　2001　「となみ弥生人の足跡」『砺波散村地域研究所研究紀要』第18号
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』
楠　正勝　1989　『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』　金沢市教育委員会
栗山雅夫　1998　『富山県福岡町下老子笹川遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会
財団法人富山県文化振興財団　1996　『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』
〃　1997　『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』
〃　1998　『埋蔵文化財調査概要－平成９年度－』
高梨清志・越前慶祐　2000　『富山県中新川郡舟橋村浦田遺跡発掘調査報告』　舟橋村教育委員会
立山町教育委員会　1987　『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
富山県埋蔵文化財センター　1982　『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』　上市町教育委員会
〃　1984　『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品（本文）・総括編―』　上市町教育委員会
〃　1986　『小杉流通業務団地内遺跡群　第７次緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
西井龍儀　1985　「砺波平野進出の足跡」『砺波散村地域研究所研究紀要』第２号
増山　仁　1992　『金沢市専光寺養魚場遺跡』　金沢市教育委員会
〃　1988　『金沢市磯部運動公園遺跡』　金沢市教育委員会
〃　1989　「小松式土器の再検討」『北陸の考古学Ⅱ』　石川考古学研究会
森　隆　1996　「江尻遺跡の近代屋敷跡について」『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』　財団法人富山県文化振興財団
谷内尾　晋司　1983　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会
吉岡康暢　1991　「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁［古代編］』　六興出版



写真図版 1　航空写真（1946年）

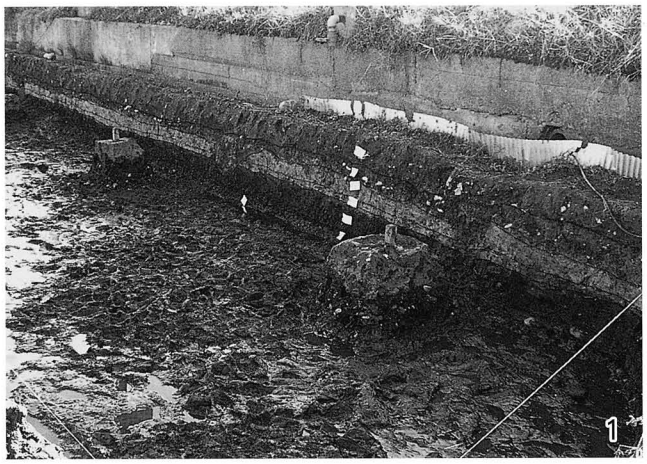


写真図版２　小縮尺航空写真（1946年）

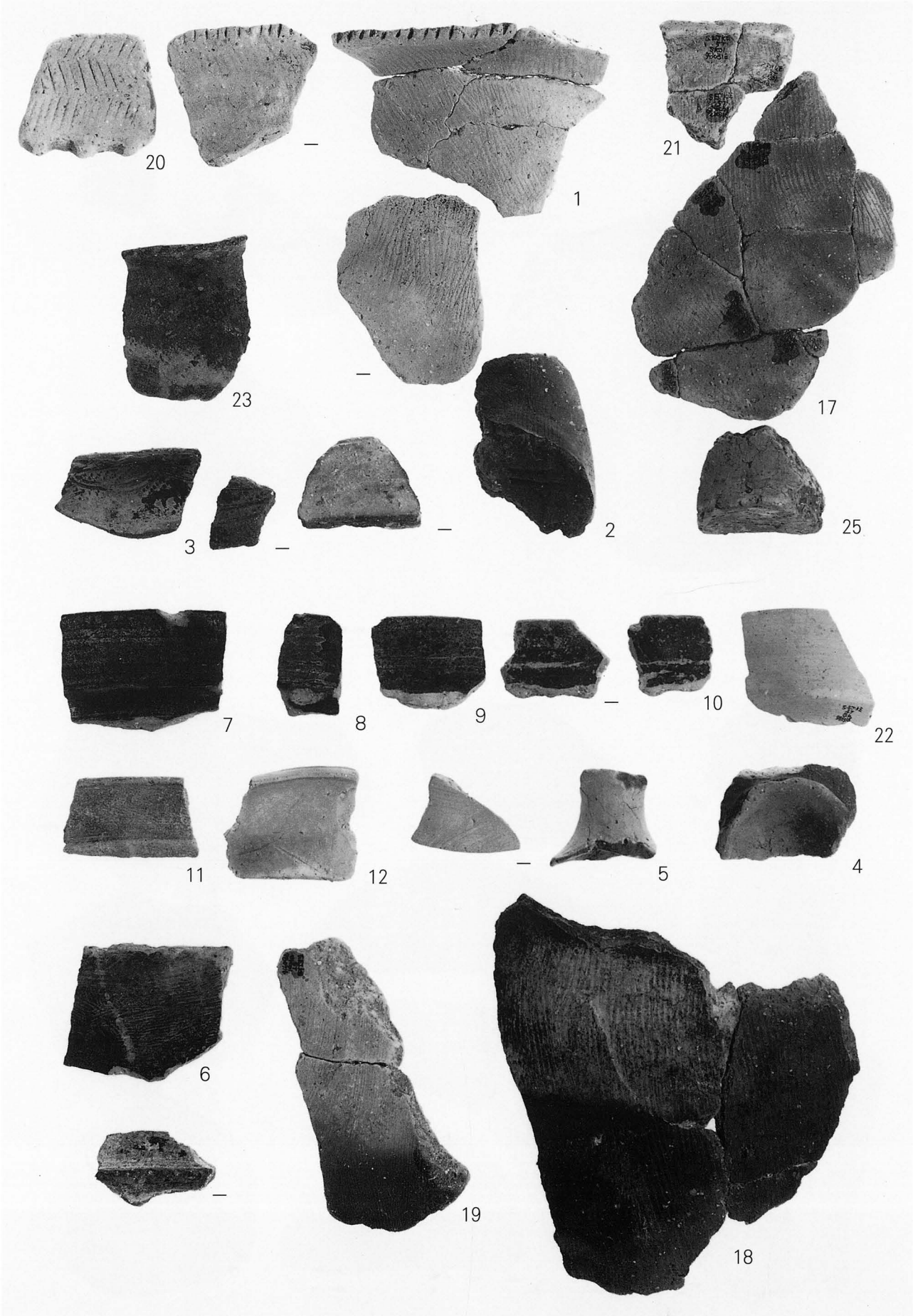
写真図版３　調査区全景（南から）

写真図版４　１．調査区遠景（南から）　２．調査区全景

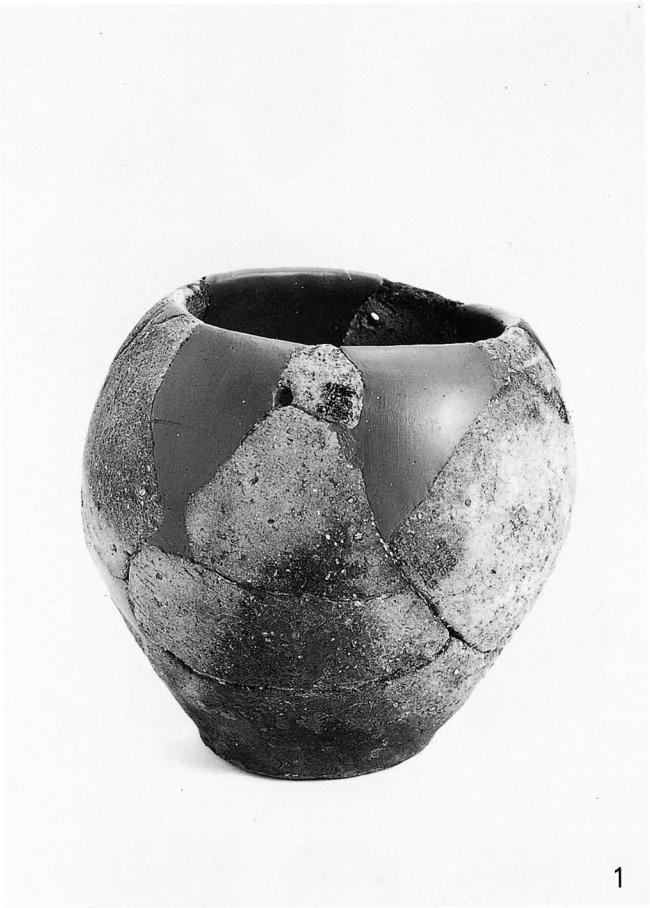
写真図版５　１．ＳＥ01検出状況（東から）　２．同石組部分　３．同断割り状況　４．同断割完掘状況　５．ＳＤ02内樹根

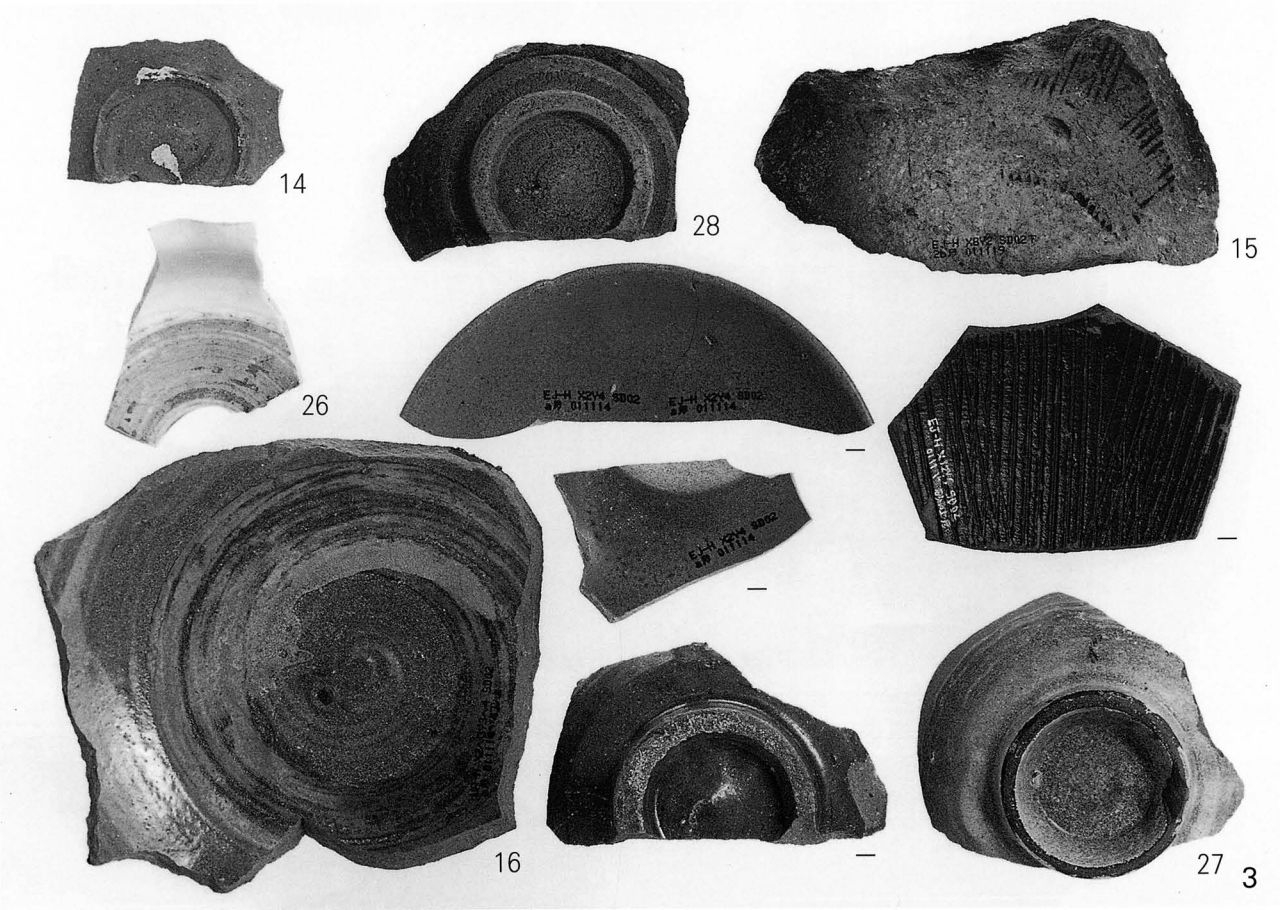


写真図版６　１．調査区土層堆積状況（北東から）　２．ＳＤ01坑列検出状況（東から）　３．ＳＤ02内樹根検出状況（北から）
４．ＳＫ01完掘状況　５．磨製石斧出土状況　６．弥生土器出土状況　７．同　８．作業風景



写真図版７　出土遺物（1/2）





写真図版８　出土遺物　1.弥生土器無頸壺　2.石器　3.近世以降陶磁器(1/2)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくおかまちえじりいせきはっくつちょうさほうこく
書名	富山県福岡町江尻遺跡発掘調査報告
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	１０
編著者名	栗山雅夫
編集・発行機関	福岡町教育委員会
所在地	〒939－0192　富山県西砺波郡福岡町大滝44番地　TEL 0766－64－5333
発行年月日	西暦２００２年３月29日

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えじり 江尻	ふくおかまちえじり 福岡町江尻	16224	422073	36 度 41 分 50 秒	136度 56 分 30 秒	20011030 ～ 20011128	300㎡	県道歩道新設工事に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江尻	集落	弥生時代中期後半・終末期、近世	溝(近世)、井戸(近世)、弥生(土坑)	弥生中期後半土器・弥生終末期土器・石鏃・緑色凝灰岩剥片、越中瀬戸・肥前陶磁	天王山式土器少数出土

富山県　福岡町
江尻遺跡発掘調査報告

発　行　日　平成14年３月29日
編集・発行　福岡町教育委員会
〒939-0192
富山県西砺波郡福岡町大滝44番地
TEL 0766－64－5333
印　　刷　株式会社 チューエツ